No. 1009

野鳥を探して

街から小鳥が減っていく。練馬区に住む山口さんの自宅の庭には、小鳥が住みやすいように、池をつくり、巣箱を木にかけてあるが、年々やってくる小鳥の種類も、数も減っているという。
「都市化が小鳥の減った理由ではない。人間に鳥を愛する気持があれば、小鳥はやってくる。小鳥は人間のところに来たがっているんです」
と語る山口さん。「日本野鳥の会」の理事でもある山口さんは、これまで東京近辺を歩き廻りいかに野鳥が住みにくい状態にあるかを痛切に感じたという。
千葉県行徳、ここは、東京湾の埋立地だ。かつてここの湿地帯は絶好の野鳥の遊び場であった。子供達も、自然の中で、鳥の観察を楽しんでいた。しかし干潟は埋てられ、追いやられていく野鳥。国が保護区に指定した干潟はヘドロで埋立てつくられたものだ。こんな所に鳥がくるわけがないと野鳥の会のメンバーは怒る。人間社会から減りつつある野鳥を探して歩き廻るメンバーの眼に映るものは、ブルドーザーやクレーンに押しやられる鳥の姿だ。
鳥が住めなくなったところに人間が住めるはずがない。
鳥を守ることは人間自身をも守る事だとメンバーは語る。
愛鳥週間。今や、個人の趣味ではかたずけられない時代になったようだ。

仏サマも住宅難

限りない発展を求めて日夜続けられる建設、都会の大動脈といいたげに伸び続ける高速道路、この開発の波に永い眠りからたたき起こされた〝人々〟がいる。板橋区の名刹・乗蓮寺では、この程、首都高速5号線が同寺の上を高架で通ることになったため、お寺の引越しを決意、600年住みなれた土地を離れることになった。
室町時代に創設されたというだけに、お墓も多く、1200基を越える。〝転居〟先、赤塚の敷地には荷台いっぱい墓石を積んだトラックが連日、ひっきりなしにやって来る。
大事な仏サマにキズをつけては大変と作業は慎重そのもの、そのうえ、人間の都合で長い眠りをさまされた仏サマの怒りを受けては一大事と壇家の人々を呼んで法事も欠さない。
千駄ケ谷の仙寿院の墓地の下を車がスイスイ。毎日排気ガスと騒音でさぞや仏サマもつらかろう。
開通したばかりの武蔵野線、三郷駅前広場の一角には取り残された十数個の墓石が心細げに身を寄せ合っている。ここも、やがては移転せざるを得ない運命にあるという。
安住の地を求める苦労は、この世ばかりではないようだ。